

Title	時間の社会学の現代的動向
Sub Title	
Author	鳥越, 信吾(Torigoe, Shingo)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2017
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.84 (2017.) ,p.63- 66
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成29年度博士課程学生研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000084-0063

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

時間の社会学の現代的動向

鳥越信吾

今年度、「時間の社会学の現代的動向」という主題のもとに研究を行った。本報告書では、時間の社会学の動向を見据えながら社会理論の展開を行っているドイツの社会学者ハルトムート・ローザの代表的著作である『加速化Beschleunigung』（Rosa 2005）の、主として序論を取り上げ、それに依拠しながら今日の時間の社会学の趨勢を取り出してみたい。なお、彼がこの作品のなかで主題化している「加速化」という現象については、すでに伊藤（2016）が検討を行っている。そのため本報告書ではこの現象それ自体についての説明はそちらに譲り、ローザが時間および時間の社会学をどのように扱っているのかに焦点を絞る。

1 社会理論における時間の等閑視という問題。その原因としての時間の社会学の「独我論」化

ローザの特徴は、社会理論と時間の社会学の双方の動向に配慮しながら、自身の理論展開を行っていることにある。まず社会理論に関するローザの見立てに目をやってみよう。彼によれば、これまでの社会理論の問題点は、時間次元の等閑視にある。すなわち社会理論はこれまで、個人化や合理化など、様々な角度から近代社会について説明してきた。しかしながら、ギデンズやルーマンらの統合的な社会理論家がすでに指摘しているとおり、その際時間の問題は十分な注意を払われてはこなかった。この点への反省をふまえ、ローザは「時間的パースペクティブを分析に付け加えないかぎり、近代社会の特性と、その構造的・文化的展開の論理は適切には把握されえない」（Rosa 2003: 4）という立場をとっている。

もちろん、近代化過程はそれ自体時間的現象であり、その意味ですべての近代化論は時間に関わるものではある。これをふまえたうえでローザが強調するのは、近代化は、「時間の中で多層的な過程であるばかりでなく」、「何よりもまず時間構造および時間地平それ自体が、文化的・構造的にきわめて重要な意味で変容する」（Rosa 2005: 25）過程だというふうに理解されねばならないこと、すなわち近代化過程は、均質な時空間の中で生起する現象としてだけでなく、時間そのものがその中で変質していく過程として把握されねばならないことである。

だが、A・ギデンズやP・ブルデュー、そしてN・ルーマンが、社会理論に時間という次元を導入する必要性を提起してからすでに四半世紀以上が経過している。彼ら自身が時間を重要視した理論展開を行い、またそれをふまえ、近年ではアダムやナセヒらを筆頭に、社会理論における時間の重要性がさまざまに主張されている（Adam 1990=1997; Nassehi 1993; 鳥越2015）。それではローザはいかなる理由で、いまだ社会理論が時間を等閑視していると認識しているのだろうか。

その理由は、「時間の社会学Zeitsoziologie」の現状にある。時間の社会学に関心をもつ多くの社会学者がその不在を嘆いているにもかかわらず、ローザによれば今日ではすでに「まさしく山のように」たくさん時間の社会学の研究がなされている（Rosa 2005: 20）。ただし、これまでの時間の社会学は、いわば「独我論的solipsistisch」に、研究を展開してきているところに問題をもっている（Rosa 2005: 20）。彼の見立てに則れば、既存の時間の社会学の研究は次の三つのカテゴリーに区分することができる。第

一に、時間の社会学についてのレビュー論文。第二に「理論に乏しい水準で、方法論折衷のかつ場当たり的に」行われる、「社会諸科学の下位領域にその題材という点で関わる」諸研究——たとえば、家族の時間に関する経験的研究。第三に、「そこでは経験的な現象の探究がまったく視野の外に置かれている」ような、高度に抽象的なレベルでの理論的探究 (Rosa 2005: 21-2)。この三つである。ローザが特に問題視しているのは後二者であるため、これらに絞って見ていくと、まず前者の時間についての経験的研究は、時間を単に「自明の *selbstevidente* 量として」前提とするため、時間概念そのものを問題にすることはない。他方で後者の時間についての理論的研究は、時間概念そのものへと接近していくことを目指すものの、その際互いに通約不可能な「まったく異なった問い」や「異なった焦点」から研究を行っているがゆえに、「統一的な社会科学的時間概念を得るための何らの見通しも」(Rosa 2005: 22) 開くことができていない。ローザによれば、後者の時間についての理論的研究は、「時間を計り知れない神秘」(Rosa 2005: 23) として取り扱いすぎるがあまり、このような断片化が生じているという。

したがってローザの見立てにしたがえば、これら二つに大別されうるこれまでの時間の社会学は、時間を自明のものとして前提とするにとどまるか、それとも時間の神秘に翻弄されすぎることのどちらかに分極化していることになる。彼はこのような時間の社会学の現状を、次のよく知られたアウグスティヌスの言に要約されるようなものであると特徴づけている——時間とは何か。私に誰も問わなければ、私はそれを知っている。それを説明しようとする、私はそれを知らない。このように、時間の社会学が経験的研究と理論的研究とに分離している現況を、ローザは「独我論」的だと形容している。

ローザによれば、時間の社会学が「独我論」的になされているがゆえに、時間の社会学は社会理論に対して適切に利用可能な時間概念を提出することができていない。その結果、社会理論は、いまだ十分な時間概念を獲得することができず、時間という主題に十分に光をあてることのできないまま、研究を行っていることになる。

時間の社会学のこうした不首尾は、この〔時間の社会学という〕下位領域を社会諸科学のディシプリンの準則の中で確立することの困難という点だけでなく、何よりもアクチュアルな社会理論や近代分析、時代診断を定式化するという点で、深刻な結果をもたらしている。つまり、これまでの時間の社会学的認識は、さほど生産性をもたず、また体系的な社会科学・社会哲学の理論の構想への接続可能性に乏しい。そのため、社会理論や近代分析、時代診断は今もなお、時間的パースペクティブを排除したうえで研究を進めることを余儀なくされている。(Rosa 2005: 23, 亀甲括弧は筆者)

ローザが社会理論における時間問題の等閑視を問題にするその根拠は、このような時間の社会学の不首尾、さらには、時間の社会学と社会理論とのあいだの断絶にある。こうした事情から、ローザは社会理論における時間概念の等閑視という命題を提示しているわけである。

2 社会理論が時間を問うことの意義

ローザはこの問題を解決すべく、この作品のなかで「加速化」という時間現象を理論的に、しかし経験的な検証可能性も視野に入れながら検討していく。この試みが成功しているかどうかは、彼の他の著作も考慮に入れた上での周到な検討が必要になるため、本報告書ではそこに立ち入ることは控えたい。代わりに、なぜ社会理論が時間という問題を探求する必要があると彼が考えているのかということに、

ごく簡単にはあるが光を当てたい。

ローザが時間問題を検討する必要性を主張することの主たる理由は、近代化の構成的な次元としての「加速化」を捉えなければ、社会理論が近代化のダイナミズムを十分に洞察したことにはならないという彼の認識にある。だがそれに加え、ローザは社会理論が時間を主題化するもう一つの意義について述べている。以下では後者について見ていこう。

ローザの述べるところによれば、「社会理論的な問題設定に時間分析の立場から接近していくやり方の決定的な利点」は、時間が「行為者のパースペクティブとシステムのパースペクティブの、唯一の *der*とは言わないまでもひとつの *ein* 体系的な結節点だという点にある」(Rosa 2005: 25)。より具体的に言えば、まず第一に、時間は「一方で行為者の指向 *Orientierung* と自己関係に対して構成的」(Rosa 2005: 26) である。すなわち時間とはまずもって行為者にとって「主観的に」構築され経験されるものであり、そのことを通して行為者の自己に対する関係や、彼らの日常および人生の組織化はなされていく (cf. Rosa 2005: 32)。だが第二に、時間は「行為者にとってはいわば「人為の及ばない *naturgegebenes* 事実」として立ち現れるという点で、諸個人による自由裁量にはない」(Rosa 2005: 27)——すなわち時間は行為者の操作から離れて「客観的に」存在するものとみなされている。ローザによれば、時間が主観的なものであると同時に客観的なものであるというこうした事情によって、「時間構造は諸個人の人生の企図 *Lebensentwürfe* と「システムの」要件とのあいだの調整と統合のための中心的な地点をなしている」(Rosa 2005: 27)。換言すれば時間とは、ローザの表現で言えば行為者のパースペクティブとシステムのパースペクティブの双方を、つまりマイクロとマクロの双方を、社会学が十全に取り扱うための鍵となる概念だということになる。

したがってローザは、単に彼の主要概念としての「加速化」を位置づけるための前置きとして、社会理論が時間という問題を射程に入れる必要性を提起しているわけではない。むしろ彼が、時間の問題を社会理論の根本問題として把握していることの証左である¹。

時間構造の中では、凸レンズの中のごとく、社会および文化のあり方 *Arrangement* の基底にある諸々の原理と傾向が、それらの連関のうちでおのれを明るみに出してくる。これをふまえて言えば、この研究の基礎は次の確信にある。すなわち、適切な社会科学的時代診断 *Zeitdiagnosen* は事実上、その語の真正な意味で時間診断 *Zeit-Diagnosen* でなければならないはずだということ、これである。(Rosa 2005: 38)

以上本報告書では、時間の社会学と社会理論についてのローザの見立てを概観してきた。この見立てについての評価も、本報告書では消極的な理由から差し控えるが、時間の問題について積極的な議論を行っているローザの仕事の意義を見定めることは、時間の社会学の展開にとって必要な研究の方途であると言える。

注

¹ このような時間の把握の仕方は、真木悠介『時間の比較社会学』(真木1981)を想起させる。ローザは『加速化』の後の著作である『加速化と疎外：後期近代の時間性についての批判理論の構想』(Rosa 2013)で疎外論の観点から時間の問題を捉えているが、この観点も真木とよく似ている。これについては別稿を期したい。真木の時間論については拙稿(鳥越2016)を参照のこと。

文献

- Adam, B. 1990, *Time and Social Theory*, polity.=1997, 伊藤誓・磯山甚一訳『時間と社会理論』法政大学出版局。
- 伊藤賢一, 2016, 「批判理論としての社会的加速化論—ローザ理論の射程」『社会学史研究』38: 25-40.
- Nassehi, A. 1993, *Die Zeit der Gesellschaft*, VS Verlag.
- Rosa, H. 2005, *Beschleunigung: Die Veränderung der Zeitstrukturen in der Moderne*, Suhrkamp.
- , 2013, *Beschleunigung und Entfremdung: Entwurf einer kritischen Theorie spätmoderner Zeitlichkeit*, Suhrkamp.
- 鳥越信吾, 2015, 「時間の社会学の展開—“近代的時間” 観をめぐって」, 『人間と社会の探求』, 慶應義塾大学社会学研究科, 79: 83-97.
- , 2016, 「もう一つの時間の比較社会学—真木悠介『時間の比較社会学』からの展開」奥村隆編『作田啓一 vs. 見田宗介』弘文堂, 145-177.